

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 中尾 道子

本論文は、朝鮮時代(1392-1910)に制作された各種人物画のうち契会図や雅集図など実在の人物を集団として描いた作品と画家自身による自画像的作品を、表現様式の観点から分析するとともに画家・像主(描かれた人々)・鑑賞者といった作品をめぐる人間関係のあり方や絵画の鑑賞形態とも関連づけて考察したものである。朝鮮時代には、図画署所属の画員として職業的に絵画制作に従事する宮廷画家によって支配層かつ知識人層である士大夫・文人を像主とする作品が多数描かれた。また、士大夫・文人のなかにも自ら絵筆を執った者が存在した。当時における絵画の主要な鑑賞者も士大夫・文人層であった。したがって本論文は、当時の人物画のもつ意味を士大夫・文人層の社会的状況との関連性において読み解こうとした試みであるといえることができる。

本論文でまず取り上げられるのは契会図である。士大夫・文人の宴会の様態を画員が記録した契会図は、16世紀中葉に至って山水中心から宴会に参加した人物中心へと構図上の変化を生じたが、本論文ではその過程と意味が検討される(第一章)。次に取り上げられるのは雅集図と呼ばれる18世紀の作品群である。雅集図では文人画家が自己を集団のなかに描いたが、その際、故事・古典を借りた理想化をはじめ多様な演出がなされたことが明らかにされ(第二章)、また、宮廷画家であった金弘道の「檀園図」について、士大夫・文人層との交遊を通じて彼に芽生えた文人意識の存在が指摘される(第三章)。最後に、集団のなかに自己を描く段階からさらに進んだ画家の自意識が自分自身を描く行為に向かった事例として、とくに当時は身分上の制約からあからさまな自己表現が許されなかった階層の人々による自画像作品が取り上げられる。すなわち、金弘道による複数作品の検討を通じて画員画家の置かれていた当時の状況が浮き彫りにされ(第四章)、庶孽(士大夫庶子子孫)である李麟祥の「劍僊図」が彼の社会的な位置づけとの関連から解釈される(第五章)。

従来、契会図や雅集図はそれぞれ個別に論じられてきたが、本論文では両者を実在の人物を描いたという意味で肖像画の範疇に括り、そこに18世紀後半に描かれた画家の自画像的作品をも結びつけて検討することで、朝鮮時代の絵画における人物表現の変容過程が通時的に展望されている。このような分析・叙述は斬新であり、研究史上における本論文の大きな貢献といえる。当時の社会状況との関連において絵画作品を解釈しようとした点も評価に値する。契会図に対する考察が16世紀末までしかなされていない点、文献資料の扱い方や解釈の面でやや不十分なところがみられる点など、今後改善されるべき余地はあるが、本論文の価値を大きく損なうものではない。よって本委員会では、本論文を博士(文学)の学位を授与するにふさわしい業績として認定した。